パータリプトラ（Pāṭaliputra, Pāṭaliputta）考

雲井昭善

目次

はじめに
一　釈尊とパータリ村（Pāṭaligāma）
二　仏滅後のパータリ村、パータリプッタ
三　阿育王（Aśoka）とパータリプトラ
四　パータリプトラ雑考

はじめに

マウルヤ王朝（Mauryadynasty）の首都として、南方佛教の伝える第三結集（tatiyamahāsaṃgīti, sahassikāsaṃgīti）の地として阿育王（Aśoka, Asoka. 在位年限、ほぼ西紀前二六八―二三二）と深い関わりをもつパータリプトラ（Pāṭaliputra, Pāṭaliputta）に関しては、その地理的文化史的位置の重要性が、歴史的現象の中で既に指摘されてきた。[1] いわく、古代都市としての考古学的見地からの検討と再現、セレウコス・ニーカトール（Seleukos Nikatōr）の大使メガステーネース（Megasthenes）滞在地として、そして阿育王時代における佛教盛時の中心地として等々。それにもまして玄奘（六〇〇―六六四）の『大唐西域記』や法顕（四世紀後半―四二〇前後）の『法顕伝』は、かれら求法僧の眼に映じた当

時のこの都の全貌を余蘊なく伝えている。けれども、阿育王時代のこの都の華やかさに比して、釈尊在世時代もしくは佛滅後のパータリプトラ、詳しくはパータリ村（Pāṭaligāma）、パータリプッタ（Pāṭaliputta）に関しては、現存の原始佛教資料に照応するかぎり、僅かにその一面を窺知するにとどまる。にもかかわらず、佛陀時代及び佛滅後にあって、釈尊及び佛弟子たちとこの土地との関わりを伝える経典が皆無というのではない。

この小論では、こうした資料をいと口として、パータリプトラ（現ビハール州パトナ）に焦点をあてて、この古都がもつ過去の栄光の一端を浮彫りにし、再現してみたい。

一　釈尊とパータリ村、パータリプッタ

佛教の開祖ゴータマ・ブッダ（前四六三―三八三）の出家（二九歳）求道（六ヵ年）成道（三五歳）伝道生活（四五年間）という八〇年の全生涯を通じて、釈尊とパータリプトラとの出会いは、残念ながら稀少である。釈尊の行動の軌跡を辿り、かつ阿育王時におけるこの都の盛時を想うとき、時代の変遷は別としても、われわれはこの事実にむしろ奇異の感をいだく。

現在のパトナ（ビハール州 Bihār の首都。25° 26′ N, 85° 21′ E.）の往昔の地パータリプトラは、佛陀時代はマガダ（Magadha, 摩竭陀）国の一村邑パータリガーマ（Pāṭaligāma）に過ぎなかった。そのマガダ国は、釈尊とほぼ同年代のかのセーニヤ・ビンビサーラ[2]（Seniya Bimbisāra, 頻毗娑羅、頻婆娑羅）の治国する国であり、その首都ラージャガハ（Rājagaha, Rājagṛha, 王舎城）は、西方コーサラ（Kosala, 拘薩羅）国の首都サーヴァッティ（Sāvatthi, Śrāvasti, 舎衛城）と並んで当時のインドを代表する都城であった。この二首都は、ただ佛陀時代の代表都市であったというだけでなく、佛教興起にとって重要な地理的条件をもつものであり、更には釈尊説法の場所として初期佛教教団との関わりは極めて大きい。王舎城における釈尊の活動[3]と、舎衛城における釈尊伝道活動が極めて顕著[4]であったことは、こ

の間の事情を物語って十分である。

さて、釈尊が出家直後、カピラヴァットゥ（Kapilavatthu, Kapilavastu, 迦毘羅婆蘇都）からマガダの地をめざし、マガダ国王ビンビサーラに対面[5]して以来、マガダの地は釈尊にとって重要な意味をもつ。釈尊伝道四十有余年のうち、このマガダ国において説法したと伝えられる経典をとりあげると、次の如き結果がえられる[6]。

Magadha 国

Rājagaha	126 回以上
Uruvela	16
Nālandā	9
Gayā, Gayāsisa	5
Kimbilā, Kimilā	5
Dakkhiṇāgiri	2
☒ Pāṭaligāma	2 — Udāna I, 7 経
Andhakavinda	2 — Udāna VIII, 6 経
Cālikā	5
その他	5

この王舎城における一二六回以上の説法は、舎衛城における九一〇回以上に次ぐものである。にもかかわらず、マガダの一小邑だったパータリ村を説法地とした経典は、僅かに次の二経に過ぎない。以下、その資料と内容の検討を試みたい。

(一) 『ウダーナ』一・七経（*Udāna* pp. 4-5）。雑阿含四九巻（『大正蔵』二・三六二）。別訳雑阿含一五巻（『大正蔵』二・

四八〇）

〈内容〉

「世尊はある時、パータリ村アジャカラーパカ（Ajakalāpaka）夜叉の住居アジャカラーパカに住していた。夜叉アジャカラーパカは、雨の降る夜、屋外に坐していた世尊を嚇かそうとして三度、嚇かしの語を発し「世尊、これは汝の悪鬼である」と嚇かした。世尊はこれを知って次のウダーナを唱えた。

「バラモン、己の法において彼岸に到るとき、悪鬼、妖魔を超度するだろう」と。

この経典は、初期佛教教団と夜叉⑦（yakkha, yakṣa）との関わりの中でとりあげられる一つではあるが、釈尊の説法内容としてはそれ程、重要な意味をもつものではない。

㈡　『ウダーナ』八・六経（*Udāna*, pp. 85–90）。参照『長部』第一六「大般涅槃経」（*Mahāparinibbāna-Suttanta*, *DN.* II, pp. 87–90 ; vgl. *Das Mahāparinirvāṇasūtra*, hrsg. Ernst Waldschmidt, Berlin 1950/51.）。『ヴィナヤ』大品（*Vinaya*, I, pp. 226–230）。『長阿含』二巻「遊行経」（『大正蔵』一・一二―一三）。

〈内容〉

「世尊はある時、大比丘衆といっしょにマガダ国に遊行し、パータリ村に到達した。パータリ村の在俗信者たちは、休息堂に世尊と比丘衆を食事に招いた。その時、世尊は次の如き法を説いた。

居士（在俗の信者）たちよ、破戒者には五つの患難がある。①放逸を理由として失財にあう。②破戒者には悪名が起こる。③破戒者は、クシャトリヤ、バラモン、居士、沙門の何れの集会に入っても自信がない。④破戒者は迷乱して死ぬ。⑤破戒者は身壊命終して悪趣・地獄に生まれる。

持戒にはこれら五種の患難がない。そして　①大なる積財　②名聞あり　③自信あり　④迷乱することなく　⑤身壊命終して善趣・天界に生まれる、という五種の功徳がある。」

と、説く。つづいて、

「パータリ村の居士たちは世尊の法話を聴いて随喜し、去った。そのあとで世尊は天眼通を以て、マガダの大臣スニダ(Sunidha)とヴァッサカーラ(Vassakāra)(この二人はともにバラモンであった(*Sumaṅgalavilāsinī*, p. 540))がヴァッジ・ヴァッジー(Vajji, Vaṇji, 跋耆)族の侵入を防ぐためにパータリ村に都市の城(nagara)を築きつつあるのを見た。夜更け、世尊は起き上って侍者のアーナンダ(Ānanda, 阿難)に『この地が聖なる場所(āriyaṃ āyatanaṃ)であるかぎり、商買の通路(vanipatho)であるかぎり、この地は財貨の集散する地として第一の都となるだろう。けれどもパータリプッタには火・水、内部からの不和・仲違いという三つの障難があるだろう(tayo antarāyā bhavissanti, aggito vā udakato vā abbhantarato vā mithu bhedā iti)』と語った。

後日、世尊は比丘衆といっしょにマガダの大臣スニダとヴァッサカーラの家に招かれ、『若し住居を構えるなら戒徳あり、自制あり、梵行ある人々を供養せよ。其処にある諸天に供物を捧げよ。供養すればその人は供養を受け、尊重すればその人は尊重を受ける。諸天はその人を哀愍するだろう。諸天の哀愍を受ければその人は常に善福を見るだろう』と、二人の大臣に説いた。二大臣は、ゴータマの出かけて行った門をゴータマ門(Gotama-dvāra)、ゴータマが渡し場から恒河を渡った渡し場をゴータマ渡し場(Gotama-titthа)[8]と名づけた云々。」

以上がこの経典の概略であるが、この説法内容は、在俗信者に対する人間の生き方、戒を持つことの重要性を説いたところにある。この説相は、仏滅後の第三結集や、阿育王の法勅にみられる戒律をめぐる提案がパータリプトラを中心になされたことと関係する。

ところで、『ウダーナ』の右の経典は、そのまま『長部』第一六経(*Mahāparinibbāna-suttanta*, 特に *DN*. II, pp. 87-90)にみられるが、ここで筆者がとりあげたい点は、「大般涅槃経」の以下の叙述である。

釈尊最後の旅を伝える「大般涅槃経」によると—、

王舎城—霊鷲山—アンバラッティカー（Ambalaṭṭhikā）園—ナーランダー（Nālanda）—パータリ村—コーティ村（Koṭigāma）—ナーディカ（Nādika）村—ヴェーサーリー（Vesālī）—ヴェールヴァ村（Veluvagāmaka, ここで最後の雨安居をする。）—ヴェーサーリー（行乞）—チャーパーラ（Cāpāla）—バンダ村（Bhaṇḍagāma）—ハッティ村（Hatthi）—アンバ村（Amba）—ジャンブ村（Jambu）—ボーガ城（Bhoga）—パーヴァー城（Pāvā, チュンダのアンバ林で最後の食をうける）—クシナーラー・クシナガラ（Kusinārā, Kusinagara 入涅槃）

釈尊最後のこの旅からすれば、《われ出家（二九歳）してより五一年。正理正法の地を遊行し》（*DN*. II, p. 151）、既に八〇歳にしてラージャガハ～ナーランダー～パータリ村へ巡化したことになる。換言すれば、パータリプトラ（当時のパータリ村）は、釈尊にとってその最後の年に初めて重要な位置づけをもったことになる。そのことは、釈尊がこの地で何を見聞し、何を語ったかという内容に関わってくる。

『長部』の叙述（*DN*. II, p. 87–）は他の二資料（*Vinaya*, I, p. 228–; *Udāna*, p. 88）に共通する記録ではあるが、アジャータサットゥ（Ajātasattu, Ajātaśatru, 阿闍世王）が二大臣に《ヴァッジ・ヴァッジー族（Vajji, pl. Vajji）に備えるためにパータリ村に都城を築く》（Pāṭaliggāme nagaraṃ māpenti Vajjinaṃ paṭibāhāya）という項が重要である。何故なら、王舎城は要害堅固の地であるが、マガダ国王が領土の拡大を志向する場合、王舎城に近くてしかも百川の合流する交通至便のパータリ村が選ばれ、ヴァッジー族に備えたからである。もとよりこの都城（nagara）の全貌は知る由もないが、後世パータリプトラ都市構造の原型となったことは推察できよう。このパータリ村は、既に《百川の流入する、財貨の集まる地》（puṭabhedanaṃ, *Vinaya*, I, p. 229; *Udāna*, p. 88; *DN*, II, pp. 87–8.）という記録を重視（O. Franke; *Der Dīghanikāya*, SS. 190–191, Anm.）するならば、往古の時代にはガンジス河（恒河）の船着場であった、と考えてよい。そのことは、ゴータマが恒河を渡った渡し場をゴータマ渡し場（Gotama-tittha）と呼んだ前述の叙述によっても知られよう。釈尊が在俗信者たちへの説法の中で、《この地が最勝の都市の城となるだろう（agganagaram

bhavissati)》と予言した[9]ことは、後代の華の都（kusumapura, pupphapura, puspapura）パータリプトラとの関連を語ったものであろうか。ただ、《火難、水難、内部の仲違いから三障難あり》と予言したことは、ヴァッジ共和国とのかねあいから出た発想であろう。むしろこの経典で注目したい点は、破戒者と持戒者に対する釈尊の説法にある。[10]

二　佛滅後のパータリ村、パータリプッタ

パータリプトラの漢訳語例として、（音写）波羅利弗多羅、波羅利弗妬路、波羅黎弗都盧。（音略）巴羅利弗、巴陵弗、巴連弗、波吒離、巴隣、波羅梨、波吒羅、波吒聳子。（音訳）波羅利子、波吒梨子処、華子城。等が挙げられる。[11]

先ず『西域記』の叙述（『大正蔵』五一・九一〇下）によれば―、

殑伽（Gaṅgā, ガンジス河）河南有二故城一。周七十余里。荒蕪雖レ久基址尚有。昔者人寿無量歳時号二拘蘇摩補羅城一。（唐言二香花宮城一。）王宮多レ華故以名焉。逮二乎人寿数千歳一。更名二波吒聳子城一。（旧曰二巴連弗邑一。訛也。）

ここで注意したい点は、古くは　①拘蘇摩補羅城と言い、後に　②波吒聳子城と名づけた云々の叙述である。①はパーリ語（サンスクリット語も同じ）の kusumapura すなわち華・花（kusuma）〔の〕城・都（pura）である。華子城という呼称はここに由来する。玄奘は「華多きを以てこの名がある」と述べるが、いわゆる kusumapura という表現は何に由来するのであろうか。

原始佛教聖典の古層に属するといわれる『テ！リー・ガーター』（*Therīgāthā*, 長老尼偈）四〇〇偈によると―、

クスマ（華）という名のある都パータリプッタ―そこは素晴しい土地であるが―において、釈迦族の家系に生まれた二人の有徳の比丘尼があった。（nagaramhi kusumanāme Paṭaliputtamhi pathaviyā, maṇḍe Sakya-kulakulināyo (°niyo) dve bhikkuniyo guṇavatiyo. *Th*². v. 400)

と、ある。右の詩偈に対する註釈（*Paramatthadīpanī*, *Th*². p. 265）によると、

そこで《華の名のある都で》とは、華の都（kusumapura）という如く花という語で把えられた名のある都で（kusumasaddena gahitanāmake nagare）ということである。いま、この都（城）をパータリプッタにおいてと同形として示すのである。《素晴しき土地において》とは、全ての土地にあって素晴しくなれる、という義。《釈迦族の家系に生まれたる》とは、釈迦族における良家の娘たちであり、釈子である世尊の教えにおいて出家せることで、斯様に言ったのである。

と、みえる。パータリプトラをクスマ・プラと並んで華の都（pupphapura, puspapura）と表現する資料は『マハーヴァンサ』（*Mahāvaṁsa*, 大史）にいくつか見れるし、[12]『阿育王伝』[13]には花氏城と称している。

ところで、クシナーラー（クシナガラ）における釈尊入涅槃後の舎利分配当時、パータリプッタはその配分に与からなかった（*DN*. II, pp. 164-167）。しかし、『ブッダ・バンサ』（Buddhavaṁsa, 佛種姓経）では、次の如く叙述する。[14]いま、両経を比較してみると—、

八基の舎利塔

マガダの阿闍世王——王舎城——舎利塔

ヴェーサーリー（毗舎離）のヴァッジー（跋耆）族——ヴェーサーリー——舎利塔

カピラ城の釈迦族——カピラ城——舎利塔

アッラカッパ（遮羅頗）のブリ族——舎利塔

ラーマガーマ（羅摩村）のコーリヤ族——ラーマ村——舎利塔

ヴェータディーパ（毗留提）の婆羅門——ヴェータディーパ——舎利塔

パーヴァー（波婆）のマッラ族——パーヴァー——舎利塔

クシナーラー（クシナガラ拘尸那伽羅）——クシナーラー——舎利塔

瓶　塔

ドーナ婆羅門

灰　塔

ピッパリヴァナ（畢鉢羅村）のモーリヤ族

以上については『長部』「大般涅槃経」と『ブッダ・ヴァンサ』に共通である。『ブッダ・ヴァンサ』はこのあとに、[15]

パータリプッタに水鉢（udaka-patta）と帯。チャンパー城に水浴衣（udaka-sāṭikā）。コーサラ国に白毫（uṇṇa-loma）があった。

とし、

ゴータマ大仙の舎利分配は、衆生への慈悲のためなり、と古人は伝えた。

と、結んでいる。もとよりこの記事は、「佛教・釈尊の教えが広く流布された」とする発想から生まれたものであるが、パータリプトラが佛滅後にあって徐々に脚光を浴びてきた素地を窺う上で注目してよい。この事柄に関連して、

佛涅槃後。阿闍貰王以二人民転レ少故。捨二王舎城一其辺更作二一小城一。広長一由旬。名二波羅利弗多羅一。猶尚二於諸城中一最大。[16]

と。この経証は、マガダの首都が王舎城からパータリプトラへ移行したプロセスを示す一つではなかろうか。

ところで佛滅後のパータリプトラにおける佛弟子などの対話は、主としてクックタ・アーラーマ（Kukkuṭārāma, 屈屈吒阿羅摩、鶏園、鶏林精舎、倶師羅園、鶏頭摩寺、鶏園寺）をめぐって展開する。この鶏園寺について玄奘は、

故城東南有二屈屈吒阿濫摩（唐言二鶏園一）僧伽藍一。無憂王之所レ建焉。[17]

と、いう。しかし阿育王の出生年代に比定したとき、この記録は誤りであるとみなければない。何故なら佛弟子阿難は、既に鶏林精舎、鶏園寺にあってパータリ村の在俗信者たちに説法していたからである。鶏園寺と阿育寺（Asoka-

rāma)、そしてこの両寺の建立者については後述するとして、むしろここでは、『増支部』第一一集一七経（*AN.* V, p. 342- ）、『中部』第五二「八城経」（*Aṭṭhakanāgara-s.*）、漢訳『中阿含』二一七（『大正蔵』一・八〇二上）、十支居入城人経（『大正蔵』一・九一六上）などにみえる叙述――、

アッタカ村の住人ダサマ（Dasama）居士は、鶏園寺の一比丘を訪れ、ヴェールヴァ村にいた阿難の説法を聞いて喜び、パータリプッタとヴェーサーリーの比丘サンガに供養し、五百の精舎を阿難のために建立す。

という記録に関わっていたのではなかろうか。

さて、鶏園寺にかかわる経典[18]と内容を列挙すると――、

① 『相応部』四五・一八―二〇経「鶏林精舎」（*SN.* V, p. 15-, cf. p. 171- ）

〈内容〉

鶏林精舎に阿難と跋陀羅（Bhadda）が住す。阿難は、八支の邪道は非梵行であり、八支聖道こそ梵行である、と説く。

② 『増支部』五・五〇経（*AN.* III, pp. 57-63）＝『増一阿含』二四（『大正蔵』二・六七九上）

ナーラダ（Nārada）比丘、パータリ村の鶏園精舎にあり。ムンダ（Muṇḍa）王が王妃バッダー（Bhadda）を失なって喪心しているのを見、老・病・死・尽・滅の五処は誰人も避けることができない、と説法して王の悲しみの矢を抜いた。

③ 『増支部』一一・一七経（*AN.* V, p. 342- ）相当漢訳前出。cf. *MN.* No. 52（*MN.* I, p. 349- ）

パータリ村に来ていたダサマ居士が阿難より四禅、四無量心・空無辺・識無辺・無所有に関する法を聞き、阿難のために五百の精舎を建立す。

④ 『大正蔵』二・一四六中

一時佛住二波羅利弗妬路国一。尊者阿難及尊者迦摩。亦在二波羅利弗妬路鶏林精舎一。

⑤ 『大正蔵』一・八〇二上

我聞如是。一時佛般涅槃後不レ久。衆多上尊名徳比丘。遊二波羅利子城一。住二在鶏園一。是時第十（Dasama）居士八城。持二多妙貨一。往二至波羅利子城一。

等、[19]が目につく。

以上、佛滅後の鶏園寺に関する経典を一瞥した。これらの経典に共通するものは、佛陀の弟子たちがこの地で活躍していたこと、と、パータリプトラにおける鶏園寺の重要さである。初期の園林、僧園（ārāma）、例えばパータリ村の鶏園（Kukkuṭārāma）、ラージャガハ（王舎城）のヴェールヴァナ園（Veḷuvanārāma, 竹林園）、ヴェーサーリーのアンバパーリー林（Ambapālivana）、コーサンビーのゴーシタ園（Ghositārāma, 瞿師羅園）、舎衛城のジェータ林（Jetavanārāma, 逝多林）の如きは、何れも都城の周辺に位置し、かつ中心地より遠からず近からざる静処で、禅定に適した土地が選ばれている。かつ其処には、佛教教団や比丘、比丘尼たち修行者の生活を保証する在俗の信者たちが住み、佛教に帰依していた現象を重視すべきであろう。

さて、鶏園寺はいったい誰が建立したのか。この設問は、阿育寺と鶏園寺との同異にも関わってくるのであるが、先ず鶏園寺の建立に関する資料を一瞥しよう。

① 『西域記』八（『大正蔵』五一・九一二中）

故城（華子城）東南有二屈屈吒阿濫摩（Kukkuṭārāma）（唐言二鶏園一）僧伽藍。無憂王（＝阿育王）之所レ建焉。無憂王初信二佛法一也。式遵崇建修二殖＝植善種一。召二集千僧一凡聖両衆。四事供養什物周給。頽毀已久基址尚在。

② 『長部』註（*DN. A.* = *Sumaṅgalavilāsinī* I, p. 319）

コーサンビー（Kosambi）にクックタ長者（Kukkuṭaseṭṭhi）パーヴァリヤ長者（Pāvāriyaseṭṭhi）ゴーシタ長

者（Ghositasetṭhi）の三豪商が住んでいた。かれらはそれぞれの国に帰り、クックタ長者によってクックタ園林（Kukkuṭārāma）が、パーヴァーリヤ長者によってパーヴァーリヤ園林（Pāvāriyārāma, Pāvārikārāma）が、ゴーシタ長者によってゴーシタ園林（Ghositārāma）が造られた。

③『ダンマ・パダ』註（*Dhammapadaṭṭhakathā*, I, pp. 203-208）

コーサンビーに住むクックタ、パーヴァーリヤ、ゴーシタの三長者が舎衛城で佛を見て帰佛す。帰国してそれぞれ自分の名の精舎を建立して教団に奉献す。

この資料の中、②③は後代の註釈家の説である点、その信憑性は確かではない。ただ、僧園（林）の寄進者が自分の名を園林に付する例の多いことからすれば、鶏園寺はクックタ長者によって建立されたともみられる。では①の阿育王建立説は如何。

阿育王がその晩年、《最後の菴摩羅果（amba, マンゴー）を鶏頭摩寺（Kukkuṭārāma）へ献じた》（『阿育王伝』三、『大正蔵』五〇・一一〇下）という如く、王が鶏園寺へ参詣したことは確かであろう。けれども、鶏園寺と佛弟子たちとの関わりから言えば、鶏園寺は阿育王以前にその原型が出来上っていたとみるのが順当であろう。ただ、阿育王が阿育寺（Asokārāma）を建立したという記録を重視するとき、阿育王が大増築したことによって鶏園寺＝阿育寺となったとみる考察が成り立つ。[20] 果たしてマララセーケーラは、『西域記』の①の資料について、アソーカ・アーラーマ（阿育寺）は古いクックタ・アーラーマ（鶏園寺）の基礎の上に建築されたと推定する。[21]

三　阿育王（Aśoka）とパータリプトラ

インド史において、政治史的、文化史的意義からみて、いわゆるパータリプトラの栄光は、阿育王のインド統一とマウルヤ王朝の盛時に始まると言って過言でない。阿育王については多くの学人の業績[22]に委ねるとして、ここでは、

阿育王とパータリプトラとの関わりに焦点をおいて論を進めたい。先ず、これに関説する代表的な資料を列挙しよう。

(一) 『マハーヴァンサ』(*Mahāvaṃsa*, p. 33『大史』)

かの阿育王は父より与えられたウッジェーニー(Ujjeni, アヴァンティ国)の王国を捨てて病めるビンドゥサーラ(Bindusāra)王のいるパータリプトラへ来た。

(二) 『ディーパバンサ』(*Dīpavaṃsa*, p. 58『島史』)

阿育王子は父王の命によって、西部インドのウッジェーニーに太守として赴任す。一日、父王の余命日夜にせまるという報告をうけ、急ぎパータリプトラに帰る。四年間に亘る王位争奪があり、末弟ティッサ(Tissa)以外の長兄スマナ(Sumana)他九八人の兄弟を殺して王位に就く。

(三) ターラナータ『印度佛教史』(寺本婉雅訳四四頁)

阿育王は諸兄弟による身の危険を感じ、父王に「自分にパータリプトラを住処として与えよ」と申し立て、父よりパータリプトラを与えられた。阿育王は都城内に五百の園林を造り、一千の管絃の婇女に囲まれて享楽の生活を送った。

(四) 『西域記』第八(『大正蔵』五一・九一一頁上)

釈迦如来涅槃之後。第一百年有=阿輸迦(唐言=無憂。旧曰=阿育〔王〕訛也。)王者。頻毘娑羅(唐言=影堅。旧=曰頻婆娑〔羅〕訛也。)王之曾孫也。自=王舎城=遷=都波吒釐。〔重〕築=外郭=周=於故城。年代浸遠唯余=故基。

右の資料において際立った相違点は、『西域記』にあっては「ビンビサーラ王の曾孫阿育」とし、他の資料では「ビンドゥサーラの子阿育」とする記事である。周知の如く、ビンビサーラ(頻毗娑羅、頻婆娑羅)は《佛陀より五年若く一五歳にして即位し、その後、佛陀の教化を受けたが最後には子の阿闍世に弑された[23]》王である。釈尊との出会いは《出家後のゴータマが王舎城に来たのを見て、その出家を断念させようとした[24]》ことに始まる。『西域記』の記事

によると、阿育王は阿闍世王の孫（＝頻毗娑羅王の曾孫）という系譜[25]になる。とすれば前述の「阿闍貰王が王舎城を捨てて一小城波羅利弗多羅を作る」（『大正蔵』二五・七八上）「ヴァッジー族に備えるため二大臣にパータリプッタに築城を命じた」（*DN.* II, p. 87-; *Vinaya* I, p. 228; *Udāna* p. 88）という伝承と矛盾する。したがって『西域記』のこの条は誤りとする見解（例えば山崎元一『アショーカ王伝説の研究』三八頁註③）が成り立つ。

他方、ビンドゥサーラ（頻頭莎羅、頻頭娑羅）の子とする資料について言えば、ビンドゥサーラは「マウルヤ王朝の祖チャンドラグプタ一世（Candragupta I）の子で王位に就き、在位二八年、百一子あって阿育王が彼の王位を嗣いだ」[26]ということに照応して、チャンドラグプタ一世―第二代ビンドゥサーラ―アショーカ（阿育）という系譜が成り立つ。チャンドラグプタこそは、シリア王セレウコス・ニーカトール（Seleukos Nikatōr）の軍を破り、インド全土における最初の大帝国（マウルヤ王朝）を創始した人物である。この王朝の最盛期を迎えたのが阿育王時代であることからすれば、アショーカ王（Aśoka, 阿育）をチャンドラグプタの孫とする見解が正当と言うべきであろう。[27]

ところで、阿育王とパータリプトラというこの項の主題に戻って考察するとき、パータリプトラの築城、遷都が誰によってなされたかという問題をめぐって、複雑に絡みあってくる。少くとも、前述の資料以外にジャイナ所伝（H. Jacobi; *Pariśiṣṭaparvan*, p. 42; *SBE.* vol. XXXII, p. XIV.）等の記事、例えば阿闍世王の子・後継者ウダーイン（Udāyin, Udāyibhadra）によるパータリプトラ建設[28]などがそれである。これらの設問は、そのまま既述の鶏園寺に関わる問題と重なってくるのであるが、それらは別の機会に譲るとして、ここでは阿育王と鶏園寺、阿育寺について論述したい。

阿育王が鶏園寺へ参詣したことは既にふれたが、それとは別に王が阿育寺（Asokārāma）を建立し、そこに詣でたという記事がみえる。それらは、『マハーヴァンサ』五・八二、一六四（参照）《自ら阿育園を作らしめた》や『阿育王伝』（『大正蔵』五〇・一〇二中―一〇四下）『阿育王経』（『大正蔵』五〇・一三五中―一三九上）『ディーパヴァンサ』七・三―四（参照）『善見律毘婆沙』（『大正蔵』二四・六八二中）の「阿育僧伽藍」にうかがわれる。佛教王といわれる阿育

王の面目は、これらの記事にその一班を窺知できるのであるが、阿育王とパータリプトラとの関わりは、第三結集地という事件に集約されよう。いわゆる第三結集そのものに関しては、既に多くの学人によって問題点がとりあげられているのであるが、ここではアショーカ王時代における仏教の中心地という点で考えてみたい。

いわゆる釈尊伝道の中心地は、仏陀時代にあってはマガダとコーサラ、王舎城と舎衛城にまたがる地域であった。仏滅後の仏教教団が、釈尊四十有余年の伝道生活に大きな比重をもつ舎衛城を離れて東方へ移行したことについては、かつて筆者も述べたところである。[29] 何故、舎衛城が仏滅後の教団史から忽然と消えたかについて、その原因を探索することは控えたい。ただ仏滅後の教団勢力の消長は、何と言っても結集の地とパラレルすること、したがって結集地を中心に考察する必要があることだけは確かである。

周知の如く結集（Saṁgīti）の歴史は、仏入滅直後の王舎城外七葉窟の結集（第一結集）。仏滅一〇〇～一一〇年後、跋闍子比丘（Vajjiputtaka）の十事問題（南北両伝共通）において十事非法を議決した（南伝、『法顕伝』『摩訶僧祇律』）ヴェーサーリー（ヴァイシャーリー）結集（第二結集）。そして南方仏教の伝える阿育王の灌頂即位第十六年（セイロンでは仏滅二三六年）のパータリプトラにおける結集（第三結集。但し問題多し）である。このパータリプトラにおける第三結集に関しては、既に識者の詳細な研究（塚本啓祥『初期仏教教団史の研究』第二篇第二、三章）があるので、今はそれらに譲るとして、要は、パータリプトラで何らかの結集がなされたという伝承を重視すれば足りる。

少くとも阿育王時代、仏教の中心地がパータリプトラであったことには異論ない。阿育王時代と広義に把えるならば、西方ウッジェーニー（アヴァンティ国）と東方ヴェーサーリー、そしてパータリプトラという広領域が推定されよう。このことは、阿育王法勅の分布からみて首肯しうる地域である。その阿育王時代に比丘教団が盛時を迎え、いわゆる賊住比丘の問題が生じて教団内部の統制すら不可能な兆候をみた。そのことは、かの阿育法勅の示すところである。サールナートの『小石柱法勅』は、

「比丘もしくは比丘尼にして、僧伽〔の和合〕を破るものは、すべてこれらに白衣を着せしめて、精舎ならざるところに住せしむべきである」

と、ある。このサールナートの法勅は「パータリプトラの大官に勅命されたと推定される」という。[30]

いま一つ、阿育王の佛教指導者として、ウパグプタ(Upagupta, 優波崛多)とモッガリプッタ・ティッサ(Moggaliputta Tissa 目犍連子帝須)が北伝、南伝の資料において脚光を浴びる。[31] 換言すれば、阿育王時代のパータリプトラは、阿育王とこの二人の佛教指導者によって佛教隆盛を迎えた反面、激増する佛教人口という現象の中で、賊住比丘を規制する何らかの法規—法勅の発令が必要であったとみられる。

四　パータリプトラ雑考

かつてアージーヴィカ教について業績を問うたA・L・バシャム(A. L. Basham)は、その著(*The Wonder that was India*, New York, 1967. 3rd ed., p. 29)の中で、「パータリプトラにおいてジャイナ聖典の大結集が行われた」と、述べている。

パータリプトラに関する都市の文化史的紹介として、L・A・ワッデル(L. A. Waddell)のすぐれた報告(*Discovery of the Lost Site of Pataliputra, the Palibothra of the Greeks*, Calcutta, 1892; *Report on Excavations of Pataliputra* (*Patna*) *do.* 1903)があり、それらを集約して"*Encyclopaedia of Religion and Ethics*" vol. 9, pp. 677ab–678ab. S. V. Patna (Pāṭaliputra)において詳しく紹介している。又、D・B・スプーナーの(D. B. Spooner; *Excavations* at Pāṭaliputra, *Annual Report of Archaelogical Survey of India*, pp. 912–913)や丸山次雄氏の「パータリプトラの都市形態」(『SD』61号, pp. 82–19, 1969)がある。

政治都市パータリプトラとその城砦都市について、佐藤圭四郎氏は『古代インド』(二三〇頁—)の中で、

中央から都の太守に任命され、地方に赴任した王族たちが駐在して行政の中心となったのは都市である。古代インドの都市は経済都市でなく、純粋な政治都市である。

と、述べ、「それは都市国家時代の都市がもっていた性格と構造をもち、パータリプトラはその代表的な一つである。」と述べている。[32]

パータリプトラの城砦都市の景況について、既にT・W・リス・デヴィッズ（T. W. Rhys Davids）が、その著（*Buddhist India*, 2nd ed., 1903, p. 262-）において、メガステーネースの著書の断片報告に拠って城壁をめぐらした城砦都市パータリプトラの構造[33]を浮彫りにしている。メガステーネースの著書の断片については、E・A・シュヴァンベック（E. A. Schwanbeck）によって編集され、マッククリンドルによって英訳された E. A. Schwanbeck ed., *Megasthenis Indica*, Bonn, 1846. J. W. McCrindle tr., *Ancient India as described by Megasthenes and Arrian*, Rev. 2nd ed., Calcutta, 1960. がある。

都市構造について、既に古く《王者の辺境に城市あり、堅固な城壁(daḷhuddāpa)と堅固な城壁楼・塁(daḷha-pākāra-toraṇa)と一門があり》(*DN.* II, p. 83) と、古代都市の姿を叙述している。いま、パータリプトラがペルシアの王都ペルセポリスと関わりをもつ点について、「パータリプトラのアショーカ王宮殿の外面的構造がペルセポリスのタレイオス大王の宮殿と類似している」と言う。[34]

もとより小論の筆者は、考古学的知識に乏しい故にこれらの諸見解に対する的確な判断を用意できない。それらについては、今後の研究課題として問題提起にとどめたい。メガステーネースがセレウコス・ニーカトールの大使として、チャンドラグプタの王宮パータリプトラに滞在(前三〇二～二八八)した記録や、メガステーネースの眼に映じたインドの宗教について述べたアラン・ダールキストの著(Allan Dahlquist; *Megasthenes and Indian Religion*, Updsala, 1962) の見解も、今後の興味ある課題として残る。

マウルヤ王朝の首都パータリプトラは、現ビハール州の首都パトナの近辺に位置した旧都城である。釈尊時代、一村邑パータリガーマに過ぎなかったこの地が、アショーカ王時において佛教盛行の中心地となった。加えて、シリアのセレウコス王の大使メガステーネースの滞在地として、インドと西方との交流がなされた地でもあった。アレクサンドロス大王のインド侵入（前三三七年）によってギリシアとインドとの交渉が始まるのであるが、メナンドロス（ミリンダ王）とナーガセーナ（那先比丘）によるギリシヤ思想と佛教との対論を伝える『ミリンダパンハー』（*Milinda-pañhā*, 那先比丘経）は、われわれに東西交流の一頁を開かせた。この経典が西北インドで生まれたというが、果たして何処であったろうか、は決しがたい。

古くガンジス河の船着場として発足したパータリプッタは、アショーカ王時にあって政治、文化の華咲く都、クスマプラと呼称された。そして、現在のパトナとみられるこの地は、イスラム王朝下には回教学研究のメッカとして、ペルシヤ語の研究地としての名をとどめた地である。この歴史の歩みを想うとき、アラビア語とペルシヤ語文献で著名なフターバクシュ東洋文庫（Khudabaksh Oriental Library）の存在する理由も首肯されよう。にもかかわらず、現パトナから受けた印象（一九七九年訪問）は、文化の香りとほど遠かったことである。華の都、華子城と呼ばれたパータリプトラの今昔を、そして時の流れを実感としてうけとめた筆者であることを付記して筆を擱く。

（一九八〇・三・五）

註① 佛教関係として、塚本啓祥『初期佛教教団史の研究』第三章二二九頁以下（パータリプトラの結集を中心にした論述）。文化史的、政治史的研究として山崎元一『アショーカ王伝説の研究』第三章以後及び付篇第一—第三章。考古学的研究として L. A. Waddel; *Discovery of the Lost Site of Pataliputra, the Palibothra of the Greeks*, Calcutta, 1892. 等。なお、小論の四参照。

② 『マハーヴァンサ』二・二五—二七に「ビンビサーラ王とシッダールタ王子とは朋友で両者の父も亦、朋友だった（二五）。菩薩（＝ブッダ）はビンビサーラ王より五歳長じ（二六）。」『スッタ・ニパータ』四〇九偈に「佛、出家して王舎城に到る。

ビンビサーラ王、佛を見て出家を断念するようすすめる。」『ダンマ・パダ註』一・八八頁「佛、三迦葉を教化後、王舎城にてビンビサーラ王の約束を果たすべく王舎城へ入る。王、竹林園を寄進す。」

③ 中村元「王舎城における釈尊の活動」（鈴木学術財団「研究年報」4）

④ 拙論「初期佛教教団と舎衛城」（「印仏研」一八・二）

⑤ *Suttanipāta*, vv. 408–409.

⑥ 前田恵学『原始佛教聖典の成立史研究』六四―五頁参照。

⑦ 拙論『初期佛教教団とヤクシャ（夜叉）とのかかわり（「宗教研究」二四二号。なお、詳しくは『佛教史学論集』（未刊）に掲載。）

⑧ tittha（tīrtha）については、拙論「tittha-kara（Sk. tīrtha-kara）について」（「佛教研究」第四号）。

⑨ *Udāna*, p. 88; *DN*. II, p. 87; *Vinaya*, I, p. 229. なお《佛、予言す。インドに二大都市あり。パータリプトラとロールカ（Roluka）なり。一つが衰える時は一つが栄え、一つが栄えるときは一つが衰える。（*Divyāvadāna*. p. 544 ff.）》

⑩ *SN*. XLV, 18 *SN*. V, p. 15.

⑪ 赤沼智善『印度佛教固有名詞辞典』四九六頁b。

⑫ 『マハーヴァンサ』二九・三六。『ディーパヴァンサ』五・三九。なお、『異部宗輪論』に「佛薄伽梵涅槃後。百有余年去聖時淹。如日久没。摩竭陀国俱蘇摩城王号無憂」（『大正蔵』四九・一五上）。

⑬ 『大正蔵』五〇・一〇〇中―一〇一下。

⑭ *Buddhavaṁsa*, p. 68–.

⑮ 『ブッダヴァンサ』二八・九（p. 68）。

⑯ 『大智度論』三（『大正蔵』二五・七八上）。

⑰ 『西域記』（『大正蔵』五一・九一二中）。『法顕伝』は鶏園寺にふれない。

⑱ 前田恵学『前掲書』一五二頁、塚本啓祥『前掲書』三一四頁以下参照。

⑲ Mahāvagga, VIII, 24. 6（*Vinaya*, I, pp. 299–300）「ここ（鶏園寺）に住した上座として Nīlāvāsin, Sāṇavāsin, Gopaka, Bhaga, Phalikasandana の名を挙げる」。

SN. V, pp. 15, 171「この園における Ānanda と Bhadda との論議」を伝える。『マハーヴァンサ』五・一二二「Muṇḍa を改宗させた Nārada, Siggava の師 Soṇaka, Candavajjī, Moggaliputta Tissa の住処」。

⑳ 赤沼智善『前掲書』三二四頁b。

㉑ Malalasekera; *Dictionary of Pali Proper Names*, vol. I, p. 615.

㉒ 塚本啓祥『アショーカ王』(サーラ叢書21)、山崎元一『前掲書』、宇井伯寿「阿育王刻文」(『印度哲学研究』四所収)。

㉓ *Mahāvaṃsa*, II, 30.

㉔ ②⑤

㉕ 塚本啓祥『初期佛教教団史の研究』七四頁以下に、ジャイナ所伝等の資料による詳述がある。

㉖ *Dīpavaṃsa*, V, 101; VI, 15.; *Mahāvaṃsa* V, 18, 39.

㉗ 塚本啓祥『前掲書』六二頁。第一篇第三章マガダ王統史、参照。

㉘ 同『前掲書』七七頁。

㉙ ④

㉚ 塚本『前掲書』三三四頁。

㉛ ウパグプタは、佛滅一〇〇年 Madhurā にグプタの子として生まれ、パータリプトラに来てアショーカ王の師となり佛跡巡拝をすすめる(*Divyāvadāna*, pp. 348-385)。モッガリプッタ・ティッサは、『論事』(*Kathāvatthu*)を作り、異流を破斥し、一千の阿羅漢を集めて阿育園(阿育寺)で結集(第三結集)す(*Dīpavaṃsa*, VII, 57-59)。

㉜ 佐藤圭四郎『古代インド』二三〇頁以下〈政治都市、パータリプトラ〉の所論。山崎元一『前掲書』二七六頁以下参照。George Woodcock: The Greeks in India, 金倉円照訳註『古代インドとギリシャ文化』五三頁以下。

㉝ 山崎『前掲書』二七八頁(註)①。

㉞ 佐藤『前掲書』二五八頁。